

健康文化

鴉と猫と人間

高田 健三

近年、大都市に住みついた鳥の集団が、色々な問題を起こしていることが時々報じられる。特に鴉による被害は、結構大きな社会問題にもなりかねないように思える。自然界にあっては、野生の動物が餌にありつくのは容易ではない。しかし、そんな生態系の中で自然のバランスは保たれていたのである。その生態系が森林の開発などによって、壊され続けている上に、更に異常気象等、突発的な現象が重なって、彼らの食物である山の木の実が不作であったり、昆虫などの小動物が減少したりすると、熊や猪などが里に餌を求めて出現することになる。空を自由に飛べる鳥は当然行動範囲も広く、都会の中心部に現れても不思議ではない。

そんな状況の中、家庭からだけではなく、レストランや呑み屋から出される「生ごみ」は、腐肉等を好む雑食性の鴉にとっては格好の餌であるに違いない。ごみ袋を食い破り、残飯を散らかされると、我々人間は、彼らを不埒者として排除しようとする。しかし、事の顛末からすると、人間側に非のあることは明らかであろう。

名古屋市の南山から八事にかけての一带は、まだ緑も多く、四季折々の野鳥の姿や鳴き声を楽しめた地域であったが、鴉が増えてから、小鳥の姿も、一頃より減ってきたように思う。マンションの建設が進み、今までの畦であった雑木林などの開発などで、追われた鴉が移動してきたのであろう。時折、ふと物の気配に振り向くと、すぐ傍の庭木の下枝に、大きな鴉がこちらを窺うように止まっていることがある。そんな時は、思わず身構えたりしてしまう。数年前から、近くのマンションの屋上にある貯水槽の足場に、鴉が巣を構えていることに気づいていた。高いところで見晴らしも良く、人間の手も届かないという、これほど安全な場所はない。かくして頻繁に姿を見せるようになった鴉は、都会派鴉の一族というところである。

おそらく山や郊外の森に棲んでいた時より、都会の方が、一年中苦勞せずして旨い餌にありつけるので、棲みついてしまった連中の血筋であろう。飽食のこの国で、毎日廃棄される「残飯」の量は膨大なものという。都会派はそれを

餌にして育てているのである。都会は彼らにとっても飽食の巷なのである。以前、大都会の盛り場から毎日出される生ごみの袋を食い破り、残飯を食べ散らかす鴉の問題を取り扱ったテレビ特集を見たことがある。ネットを掛けたりして荒らされるのを防ぐ策が講じられてはいるが、余り有効ではなさそうである。地方から都会に働きに出てきて、一度文明の甘い味を知ってしまった若者達が、故里に帰りたがらなくなる人間社会の現状からすれば、一概に鴉を責めるわけにもいくまい。

ところが、鴉が増えたことで心の中でもやもやしていたことが、昨年秋に現実となった。それは、近所の家の縁下で、野良猫が5匹の子を産んだことに始まる。初めのうちは、親が手許で面倒を見ていたが、育つに従って、子猫達の行動範囲が広がるのは当然である。続けざまの子猫の悲鳴を聞きつけた家内達が飛んでいった所、屋根の庇で遊んでいた一匹の子猫が鴉に襲われていたのである。何人かの人達で、鴉を追い払おうとしても、屋根の庇の陰でもあって、竹棹等では用を足さない。急いで梯子を持ってきて、一人が庇に上り、やっとのことで鴉を追い払い、子猫を助け出したのであった。既に目の縁をつつかれて血だらけの状態のものを、早速に獣医さんに診療してもらった結果、失明はとりとめることができたということで、皆ほっとしたことであった。

この“事件”が起きた時、私の頭をかすめたのは、60年代初め頃の、「鳥」という題のヒッチコックのサスペンス映画であった。長閑なある日の午後、サンフランシスコ湾に浮かぶボートの上で、女性が突然、かもめに襲われたことに端を発し、人間を襲い始めた鳥の大集団の恐怖を画いたものである。平和に共存していたはずの鳥達に、突然、命を脅かされた時の人間の狼狽ぶりを画いた映画は、大変示唆的であった。丁度、サンフランシスコ湾に面したバークレーに住んでいた時のことで、サンフランシスコを中心に展開するストーリーの映画は、湾岸地域の人達には何となく身近なことのよう思えたらしく、大変話題になったことを覚えている。多数の真っ黒な鴉が、通学途上の小学生を襲う光景は、身近によく見かける鳥だけに、妙にリアルであった。クライマックスでの、雀の大集団に襲われ、破壊された家の中で、目玉をつぶされた犠牲者のクローズアップのカットが、子猫の形相にオーバーラップして見えたのである。幸いに子猫がそんな犠牲にならなくてよかったとの思いが強かったのはそのせいであろう。

我が家には3匹の「内猫」がいる。蛇を除き動物なら何でも好きな家内は、迷い込んできた雑種の野良猫を飼っているのである。内猫は屋内で寝起きを許され、餌も十分に与えられている。その他に4匹の「外猫」を飼っている。彼

らは、餌は十分に貰えるが、家の中には入れて貰えない連中である。そんな猫を観察していると、それなりに生活上の秩序があるのだが、内猫の一匹はそれを守ろうとしない。動物の世界にも、アウトローは居るのである。

私の目からすると、我が家の猫は飽食の猫である。キッチンの隅にある「猫の食卓」には、いつも定番の焼いた小鰯と、数種類の餌が置いてある。更に、缶詰でも粒餌でも、同じブランドの品が続くと飽きがくるとかで、時折、メニューを変えるほどの心の配りようである。猫は我が家の一員なのである。

そんなに恵まれた(?)猫であっても、庭木の実や虫などを食べに来る小鳥を見ると野生が目ざめるのか、いつも狙いをつけるのである。たまに捕獲に成功すると、得意気に獲物を銜えて見せに来る。その都度家内は叱って獲物を取り上げるが、効き目はない。今までに、めじろなどの小鳥や、時にはきじ鳩のような大きな鳥まで掴まえた実績を持っている。猫のDNAには、鳥は上等な餌であるという情報が組み込まれているのであろう。いつぞや、新聞に大きな鳶が猫に追われて、翼を広げて飛び立つ一瞬を撮ったアマチュア写真が載ったことがあった。後を追う猫が鳶の後ろ姿にジャンプして四肢を伸ばしきった絶妙のタイミングが捉えられていて、思わず可笑しさが込み上げたことであった。猫から見れば、肉食の猛禽類でも、鳥は鳥なのである。一方、鳥には鳶でさえ、猫は危険な敵であると認識する情報がDNAに刻み込まれているのだろう。

喉の渇いた鴉が、嘴の届かない井戸の水に、石ころを銜えては放り込み、水面が上がってきたところで存分に喉を潤すことが出来たというイソップの寓話にもあるように、抜群の頭脳を持ち主である鴉のことである。この程度の子猫ならば、自分の方が強いという判断が働いてのことと思われる。必要に迫られれば、時には仲間と協力して鳶さえ追い払うとも言われる。

そうであったとしても、「食物連鎖」(自然界における捕食の順位、例えば、みみず→野ネズミ→きつね→ピューマ)の中で、上位のものが、逆に下位のものの餌食にされる構図は、どこか、異常な出来事に思える。ヒッチコックの映画は、そんな混乱した人間心理を巧妙に突いているのである。だから、ライオンや恐竜に襲われる映画と違った、じわっと迫ってくる恐怖を感じてしまう。私は原作を読んでいないが、作者が、鳥と人間関係の非日常性によって訴えたいのは、自然からの警告であろうか。異常事態は常に「突然」訪れるものなのである。映画の中だけでなく、現実の子猫事件を考えると、現代人は既成概念に安住しすぎている嫌いがありはしないかと思う。公園などの野外でベビーカーの中の赤ちゃんが、親が目を離している隙に襲われないという保障はないといえば、考えすぎになるだろうか。

最近、飛行場付近を飛び回る鳥の群が深刻な問題を引き起こしていることを耳にする。特にジェット機の離陸時に、ジェットエンジンに鳥が吸い込まれて起こるエンジントラブルで墜落事故まで起こっているという。この問題を取り扱った最近のテレビ番組は、なかなか興味深かった。鳥の集団飛行に悩まされ続けたニューヨークのケネディ空港は、色々な手を尽くした挙げ句、現在は、なんと「鷹匠」の活躍に任せているというのである。野鳥の集団が現れると、待機していた鷹匠が出動し、訓練された鷹を飛ばして、鳥を追い払うという寸法である。野鳥にしてみれば、忽然、猛然と向かってくる鷹の姿に驚き、慌てふためき、散り散りに逃げ去ることになる。ハイテクの塊のような空港の安全を守るのに、鷹等の猛禽類が、鳥や小動物を襲う自然界の習性を利用するとは皮肉と言うほかない。

鷹狩りは洋の東西を問わず昔から行われていたらしく、我が国では江戸時代、鷹匠は幕府の役職として重用されていたという。現在にも鷹匠の系統は引き継がれていると聞く。それならば、再び鷹匠に御登場願ってはどうか。相手が鷹とくれば、いくら利口な鴉でも逃げるしかないと思えるのだが。方法とは別に、問題は、追っ払った鴉の行き先である。地球環境を守る上で、自然との共生が益々重要になっている今日、彼らの安住の場所を考えてやらねば片手落ちと言われてしまう。マンションの屋上に棲み、人間と同じものを食べている鴉は、栄養の摂りすぎでそのうちに、「生活習慣病」で命を縮めるのではないかと思う。藤前干潟や海上の森の保存は、我々人間が彼らの野生保護のためにしてやれるほんの些細なことの一つなのである。

嘗て、ヨセミテ国立公園でキャンプした時、アメリカの友人が教えてくれたのは、絶対に野生の動物(熊、鹿など)に餌をやらないこと、勿論、残飯は彼らが食べないように始末することであった。一度、人間の食べ物の味を占めると、野性が失われ、人間依存度が高くなってトラブルを起こす原因になるというわけである。共生といえは聞こえはいいが、現実には努力が必要である。

私の子供の頃の記憶には、街や港に居た鴉が、夕暮れともなると、群れをつくって夕焼けの空を飛んでいく光景が残っている。行く先が鎮守の森か、近郊の山なのか定かでないが、野口雨情の童謡「七つの子」の鴉は、山の巣に残してきた子を思って、「かわいい、かわいい」と鳴く。鴉の帰る時は、都会よりやはり里山の方が相応しい。

(名古屋大学名誉教授)